

ショートステイセンターでの看取り

人的環境と物的環境から

看取り

仲間

施設

香川県木田郡三木町

短期入所生活介護 ショートステイセンター一季

介護副主任 白藤 誠

松木 香代子

松本 佳菜

toki@syurikai.com、fax 番号 087-898-1366

今回の発表の施設
またはサービスの
概要

ショートステイセンター一季では、高齢者にとって少し不便に感じるような環境でも利用者の方が、自然に生活の中で自己発揮ができるように支援している。また、高齢者福祉の理解を広げるため、定期的に地域住民との食事を設け、交流を深めている。

<取り組んだ課題>

近年、介護施設における利用者の重度化が進み、医療に対してのニーズが高くなってきている。その中で私たち施設職員は最期を迎える高齢者とのように向き合い支援する必要があるのか、実践を通して考察する。

<具体的な取り組み>

【実践事例】

- ・氏名 山田太郎氏（仮名）
- ・年齢 91歳
- ・要介護度 2
- ・障害老人の日常生活自立度 A2
- ・痴呆性老人の日常生活自立度 IIIb
- ・既往歴 悪性黒色腫（右足の踵）
脳血管性認知症
左耳下腺腫瘍（良性）
- ・キーパーソン アパートの大家
（身寄りがなく、頼りにしていた）

・利用の経緯

他事業所の通所介護、訪問介護を利用しながら一人で暮らしていた山田氏は、被害妄想が強くしかも頻回に出現していた。近隣住民やケアマネジャーが対応に困っていた時に、右足の踵に悪性黒色腫が見つかり、医師からは余命3ヶ月と診断された。キーパーソンであるアパートの大家やケアマネは、山田氏に対して特別な医療は求めず、普段と同じ生活の中で最期を迎えさせたいと願いショートステイセンター一季を利用開始となった。利用開始後1カ月は「物を盗られた」「殺し屋がくる」などの被害妄想が頻回に出現し、警察に連絡したり施設から外に出て行くなどといった行動がみられた。

【方法】

本人と周囲の環境（人的・物的）との関係を探る。

<活動の成果と評価>

夕食時に一品料理を作ることや食後の食器の後片付けを日課とした。取り組み3カ月後には被害妄想の出現が減少した。安定した穏やかな生活を送っていたが、利用後6カ月頃より足の腫瘍が大きくなり、歩行が困難となった。それでもオムツは使いたくないと強い気持ちを持っていた山田氏は、這って移動トイレで排泄した。利用から1年が経つ頃、突然足の腫瘍から出血し、亡くなる1週間前には意識レベルが低下した。夜間訪室時に、お茶を口元まで持って行くが少し口をつけて、また床に着かれた。翌日の夕方4時頃に静かに息を引き取った。

利用当初、アパートの大家やケアマネは自分達が面会に来ることが山田氏にとって本当に良いことなのかを悩んでいた。時間の流れとともに、料理を作る為に買い物に出かけたり、他の利用者と居室で談笑する姿に驚き、山田氏の顔つきが優しくなっていたことに喜んだ。亡くなった後、人と関わることを避けていた山田氏が安らかに最期を迎えることができたのは、山田氏を大切に思う仲間が傍で見守っていたからだと言われた。

今回の実践から、自分を取り巻く人達を幸せにしたいという山田氏の願いを大切にしたいアパートの大家やケアマネの思いが、山田氏の最期を穏やかに迎えられた結果へと導いたのだと思う。共に生活する仲間との距離を大切にすることで、同じ生活の場で自然に看取ることができた。

<今後の課題>

高齢者が住み慣れた地域で暮らし続ける為には介護施設が今以上、地域の中で身近な存在になる必要がある。その為に今後、家族や地域住民及び医療や行政とどのように関係を深め、信頼を得ていくのが課題として残る。